

住まいの近代化西洋化を再考する—洋風居間の形成過程を通して

松 原 小夜子

1. 「西洋風モダン」という記号

わが国における明治以降の住まいの変化過程は、伝統的な日本の住まい様式を、近代的西洋的なものに造りかえる過程であったとすることができる。この造りかえは、平面計画（間取り）をはじめ、構造、工法、材料、室内環境、意匠などあらゆる側面に及んでいる。これら諸側面のうち、本稿の主題である平面計画の点から今日の住まいをみると、居室は洋室中心で、個人の私室と、家族や客用の公室(リビングルームなど)から構成され、イス・ソファやベッドがしつらえられるなど、近代化西洋化はかなり進んでいる。昨今では輸入住宅も本格化し、100余年の近代化西洋化の過程は、近い将来完遂するかにもみえる。

しかし、履き物を脱ぐ習慣は引き継がれているし、和室も一住宅一室程度に激減したとはいえ無くなる気配はなく、浴室まわりも寝室付きプライベートバスとはならず家族共用のままであるなど、日本的要素も健在である。実際の暮らし方においても、ダイニングスペースと命名された空間で、ダイニングテーブルとイスを用いて、茶碗に箸の食事様式が続いている。リビングルームと称する部屋では、ソファをしつらえ、クリオケースを飾り、窓辺にウィンドトリートメントをあしらいながら、ソファを背もたれにして床に坐る暮らしがある。ティーテーブルではなく和机を置く例も多い。冬場にはこたつも登場する。私室と公室という居室構成を取り入れながら、日常の私的な生活の多くが公室で行われている。これらは私達の生活実感であるとともに、住まい方に関する実態調査の明示するところでもある。このように、今日の住まいと住まい方には、近代化西洋化がかなり浸透する一方で、日本的な生活習慣も根強く引き継がれているのである。

ここで少し、「近代化西洋化」の意味するところについて述べておきたい。住まいの近代化の中心思想は、実用性を重んじ機能性合理性を追求すること、つまり機能主義思想であった。近代以前の住まい様式には、機能性以外の要素、とりわけ社会的文化的意味合いや象徴的側面が大きく寄与していたのであるが、機能主義思想は、それらの削ぎ落としをも意図していた。西洋諸国においては、自国の住文化や住様式を踏まえつつ近代化が進行したが、日本では、日本住宅の伝統的側面を払拭し、西洋風に改めようとする西洋模倣の近代化、つまり「西洋風近代化」が指向された。近代化と西洋化とが不可分に進展いくという我が国の特殊事情である。

再び、今日の住まいと住まい方の様相を想起してみたい。今日の住まいは、確かに西洋風の近代住宅ではある。しかし、間取りには日本的要素が残り、住まい方においても日本風の暮らし方が様々に引き継がれている。これは要するに、住まいの近代化の思想と実際の住まいとのあいだの齟齬であり、かつまた住まいと住まい方との食い違いであるとみな

し得る。こういった食い違いがあるのであれば、今日の日本の住まいは、必ずしも合理的機能的存在であるとは言い切れず、明治以降の近代化西洋化の過程は、機能性合理性の追及過程であったとも言い切れなくなってくる。そして、近代化西洋化の過程には、機能性合理性の追及以外の何らかの要素が影響を与えていたのではないかという考えが成り立つ。

こういった観点から、筆者は、日本における住まいの近代化西洋化の過程を再考する研究に取り組み、住まいと住まい方、内部のしつらいの変化を、機能的側面からではなく、機能主義が削ぎ落とそうとした社会的文化的意味合いから考察してきた。その結果、日本の住まいの近代化過程には、日本特有のある種の逆説が潜んでいると考えるに至った。近代的で機能的であること（モダンであること）自体が、西洋を想起させる象徴的記号的存在であったという逆説である。西洋諸国に遅れて近代化を果たそうとした日本にとっては、西洋の学問、文化、住まいなどあらゆるものが、先進的で豊かな存在であり、憧れの対象だった。住まいの実用も合理も機能も、その本来の意図とともに、合理や機能が排除したはずの「進歩と豊かさや地位向上のシンボル」という意味合いを、まるでコインの表裏のように合わせ持ってきたのである。

逆説的な住まいの近代化過程は、西洋模倣ではない真に日本にふさわしい近代化の歩みをいささか鈍らせてきたように思われる。住まいの近代化過程が陥ってきた逆説に思いを馳せ、その克服をも視野に入れながら、伝統的日本住宅の優れた側面を生かし切り、日本の気候風土や生活慣習に根ざした住まいのあり方を探求していきたいものである。

この小稿では、明治後期から戦前までの住宅改良や住宅改善思想、および洋風居間の形成過程を振り返ることを通して、研究の一端を紹介したいと思う。なお詳しくは、拙著『住まいとステータス—住宅近代化の日本的逆説』（海青社刊）をご参照いただければ幸いである。

2. 中流住宅と洋風応接間

2.1 洋館と洋風応接間

明治維新以降、わが国においては、政府主導の欧化政策のもとで衣食住全般の洋風化が推進されていった。住まいにおける洋風化は、明治20年代頃から、まずは、皇族や政府高官、富豪などの上流階級の邸宅にはじまった。それは、和風の館に本格的な洋館をつなぎ合わせるという和洋館並立の形式であった。当初この洋館は、明治天皇の行幸を迎えるための御殿として設けられたが、やがて、賓客をもてなす応接空間として浸透していく¹⁾。内務省の官舎の基準を例にあげれば、内務大臣官舎では煉瓦造洋館に和館並立タイプであったが、秘書官官舎では木造洋館に和館並立、属官官舎では和館のみという違いがあったという²⁾。高価な建築物である煉瓦造洋館並立タイプを筆頭にして、和洋館を並立した邸宅は、上流階級の地位と富の輝かしいシンボルであった。

やがて生活洋風化の気運は、上流階級のみならず、新興の都市中流階層にも高まっていった。さきに述べた和洋館並立の邸宅ならば、和風を温存しながら洋風生活をも実現できるので、和と洋の対立は当面回避できる。しかし、都市中流階層にとっては、和洋並立の邸

宅は高価すぎて手が届かない。かといって、にわかに和風の住様式を捨て去るわけにもいかない。そこで、相異なる和と洋の様式を、比較的安価に合理的に、しかし見栄えよく両立させる方法はないものかが模索され、明治31年(1898)には、建築雑誌において二つの案が提示された。一つは、和風住宅をもとにしながら住宅全体に和と洋とを混在させる岡本案であった³⁾。いま一つは、在来の和風住宅をそのままにして、玄関脇に洋風の応接間を付加するという北田の和洋折衷案であった⁴⁾。この後者の案が中流階層に歓迎された。当時、中流階層が勤めていた官庁や会社などの公的部門では、すでに洋服立式に移行していたから、役所や会社関係の事務的な用件で訪問する客の応対には、洋風応接間がふさわしかった⁵⁾。洋館とまではいかずとも建物前面に洋風応接間を備えれば、洋風生活を取り入れている階層であることの証ともなる。洋風応接間を設ける住宅形式は、その後、中廊下を取り入れるなどの変容をしながら、大正、昭和戦前の時期まで、中流階層の空間的シンボルとして広く普及していくことになる。

2.2 都市中流階層の形成

中流住宅の形成は、都市部における新興中流階層の出現と関連が深い。そこで、この中流階層について考察しておきたい。

都市の中流階層が増加しはじめた時期は、明治30年頃からであった。明治27年(1894)からの日清戦争と、37年(1904)からの日露戦争は、日本の資本主義の発展をもたらした。日清戦争を機に、軍需産業、紡績業などの軽工業、銀行が発展し、日露戦争では、重工業が伸展した。産業の発展とともに、これら産業の従事者などによって都市人口が増加していく。都市人口の割合は、例えば明治31年(1898)には17.7%、36年(1903)には20.7%、41年(1908)には27.7%へと増加している⁶⁾。東京の人口が急増するのも明治30年代である。

これら都市居住者のなかには、社会の都市化近代化にともなって必然的に生み出されてくる新興の中流階層が含まれていた。新興の中流階層とは、高等学校以上の高等教育を受けた、官僚、大企業ホワイトカラー、技術者、医師、法律家、教育者などを指している。

さらに、第一次世界大戦に参戦した大正3年(1914)から7年(1918)の間に、日本の資本主義は飛躍的に発展した。重化学工業が伸展し、大戦の間に工業生産高が農業生産高を上回った。都市への人口集中と中流階層の増加も進んだ。大正7年には大学令と高等学校令が公布され、大学や高等学校の設立が認められるようになり、これを機に高等教育を受けた中流階層は急増していく。大正9年(1920)には中流階層は全国の有業人口の4.8%を占め、東京市では5人に1人が新興中流階層であったという。この頃、サラリーマンという言葉が生まれた⁷⁾。

中流階層は、身分的束縛が解かれた階層移動の自由な時代に生み出される階層である。したがって、中流階層が中流たりえるのは、世襲の身分や資産によるのではなく、もっぱら自らの研鑽によって獲得した中流という地位を維持し続けているからにほかならない。中流たりえるための不可欠の要素は、当時ではまずは学歴であった。そして職業であり、職業上の地位であり、収入である。あるいは教養や趣味趣向、生活様式などの文化性であ

る。これらを維持しつづけているかぎり「中流たりえる」ということは、逆にいえば、いつこれらを喪失するかもわからないという不安と表裏一体に生きていることを意味する。中流階層が上昇指向を強く抱く（立身出世主義）背景には、階層移動が自由であるがゆえに、下降の危険をも常にかかえていた事情がある。中流階層とは、自身の能力だけを頼りにして、上昇の可能性と下降の危険性のはざまで生きる不安な階層なのである。

3. 住宅改良思想とアメリカ

3.1 住宅改良思想

中流階層の増加を背景にして、明治30年代には、中流住宅のあり方が論じられるようになった。明治31年（1898）には、土屋元作が「家屋改良談」を発表した⁸⁾。日本家屋の欠点を指摘し、虚飾より実用を、ユカ坐からイス坐へ、室の独立、衛生と経済の重視などが論じられた。この主張はその後の住宅改良思想のさきがけとなったものといえる。

建築家による代表的な論考は、明治36年（1903）に建築雑誌に掲載された、滋賀重列「住家」⁹⁾、塚本靖「住家の話」¹⁰⁾、矢橋賢吉「本邦における家屋改良談」¹¹⁾である。これらはいずれも日本の在来の和風住宅を批判し、改良の方向を指摘したものであるが、注目すべき論点は三つある。第一は封建的遺風への批判である。主人中心の封建時代が今日の住まいにも引き継がれているが、時代は平民的に向かいつつあるから時代にふさわしい造り方にすべきという主張である。第二はプライバシー欠如への批判である。プライバシーについては、「プライバシ―・インディビジュアリティー」「シークレシー」などの言葉が用いられ、家族員個人個人の生活を重視すべきことを説いている。日本の在来の住宅では、部屋が襖障子を介して連続しているため、互いに通り抜けせざるをえず、声も聞こえてしまう。居室に自他の区別がなく個人の生活が守りえないから、きちんと間仕切りをして、個人の生活を確立すべきとの主張である。第三は畳とユカ坐への批判であった。プライバシーに関する主張ほど明確ではないが、人体の発育上や衛生上無害とはいえ、ユカに坐ったり立ったりの生活が非能率であるなどと論じられている。これらの主張は、洋室の個室と居間から構成される洋風住宅を生み出す素地となっていく。

ところで、ここで注目されるのは、滋賀はアメリカで建築教育を受けた建築家であり、他のふたりも欧米住宅の視察にもとづき論を展開している点である。わが国の住まいへの、アメリカの住まいの影響は、すでに明治期に萌芽があったのである。

こういったなか、アメリカの住宅そのものを日本に持ち込んだ人物が橋口信助であった。橋口は、元来製材業を営んでいたが、事業の失敗を機に渡米し、シアトルで下男や古着屋を経て建築を学んだ後、アメリカの組み立て住宅や部品を持ち帰り、明治42年（1909）に「あめりか屋」を開店している¹²⁾。「あめりか屋」は米国資材販売業から出発し、後に住宅設計施工業へと発展した。橋口は当時生活関連雑誌に住宅改良についての考えを寄稿している。アメリカでの生活経験にもとづき、アメリカ式の住宅は便利で堅牢であり、イス式生活は窮屈でもなく費用もさほどかからないと説き、当時大きな問題とされていた二重生活を改めるには住宅を洋式にするのが一番であるとの考えを表明している。明治44年

(1911) には、アメリカのバンガロー式住宅を日本人の住まいとして実際に建築している。中流住宅を完全にイス式にすべきとの主張、そして実物の建築は、日本の住まいへの洋風居間出現の引き金となったのである。

大正時代に入って、第一次大戦を機に産業が発展し、都市中流階層が急増したことはさきに述べた。これら中流階層は、高等教育を通じて西洋風の学問教養を身につけており、趣味趣向の点でも西洋音楽や映画、社交ダンス、カフェなどを愛するアメリカ型文化になじんでいたという。明治維新以降、まずは上流階級が取り入れてきた衣食住の洋風化は、上流階級の模倣を願う都市中流階層という担い手を得て、生活全般の改善運動へと盛り上がり、進展していく。住宅改善や生活改善を推進する団体として、大正5年(1916)の住宅改良会、同7年(1918)の日本建築協会、同9年(1920)の生活改善同盟会などが設立される。これらの会は、研究会や講演会の開催、改良住宅の紹介、雑誌発行などさまざまな活動をおこなった。これら諸活動のうち住宅改善に重要な役割を果たしたものが、一つは雑誌の発行であり、いま一つは博覧会の開催であった。

雑誌に関していえば、日本建築協会では、雑誌『建築と社会』を発行している。また、橋口がかかわった住宅改良会では、日本ではじめての住宅専門雑誌『住宅』を発行しており、これはアメリカで刊行されていた『ハウス・アンド・ガーデン』や『レディース・ホーム・ジャーナル』を手本にしたものであった。『住宅』では、住まいに関する論説の掲載、住宅設計懸賞競技の実施、アメリカ式のバンガロー住宅の紹介などを通じて、住宅洋風化の啓蒙を行うとともに、洋風住宅建設の需要を喚起する役割も果たした。

各種の博覧会や展示会についていえば、博覧会は、明治以降、それ自体が文明開花のシンボルとなって多数開催されてきたが、大正時代に入って、家庭や婦人、子どもに照準をあわせたものが登場する。家庭生活や住宅を扱った主な例では、大正4年(1915)の家庭博覧会(国民新聞社主催)、住宅博覧会(報知新聞社主催)、同8年の生活改善展覧会(文部省主催)、同11年(1922)の平和記念東京博覧会(東京府主催)、住宅改造博覧会(日本建築協会主催)などが挙げられる。家庭生活に関する展覧会のさきがけとなった家庭博覧会では、一帖半の立式台所、裁縫室、納戸、子ども室、洗濯場などが実物で展示されたほか、和洋混在の中流住宅やあめりか屋の洋式住宅なども展示された。博覧会は、生活者にとっては従来なじみの薄かった新しい商品(生活改善に役立つ商品)を、消費者にわかりやすくかつ魅力的に展示することがねらいであった。

これら博覧会の主催者には国や府県が含まれており、生活改善や住宅改善が、近代国家たらんとする日本の国家的事業であったことがわかる。また、新聞社も主催しており、博覧会の宣伝と商品紹介には、当時の主要メディアである新聞が効力を発揮していた。新聞社以外に、電鉄会社、百貨店などの民間企業も数多くの博覧会を催している。箕面有馬電鉄、三越、高島屋、白木屋、大阪毎日新聞、読売新聞、東京日日新聞などの各社が、規模は小さいが家庭博や児童博を開催している。民間企業が博覧会開催に熱心であったのは、博覧会での商品展示が、新たな生活財の消費を掘り起こすことを承知していたからである。大正期の博覧会では、家族そろって楽しみながら参加できるように、各種のイベントやア

トラクションが興行されたという¹³⁾。

こうしてこの時代に、中流階層という消費者、商品として供給される生活財、新聞・雑誌などのメディアによる宣伝という消費社会の3条件が整ったのであった。

3.2 アメリカの消費社会と中流階層

日本の住まいの洋風化は、アメリカの住宅とかかわりが深いことを先にのべた。そこで次に、19世紀後半から20世紀はじめにかけてのアメリカの住宅のありさまについて触れておきたい。

19世紀の半ばに、アメリカの上流階級は、郊外にピクチャレスクな邸宅（ヴィラ）を構えていた。ヴィラの正面側には、パーラーと呼ばれる客間が備わっており、住まいの顔として、クラシックな様式で装飾されていた。一方、労働者の住まいはコテージと呼ばれ、ここには共用室として「リビングルーム」が存在していた¹⁴⁾。リビングルームとは、元来、小住宅に設けられた空間だったのである。

南北戦争（1861～1865）後、アメリカの産業は飛躍的に発展し、それにともない中流階層が形成される。技術者、専門職、事務職などの新興中流階層は、1870年から1910年までの間に8倍に増加し、自営農民や自営業者などの旧中流階層を含む中流階層全体の6割を占めるにいったという¹⁵⁾。中流階層の人々は、当初、上流階級の住まいをモデルとして、装飾過多なクイーン・アンと呼ばれる様式を好んだ。上流の気分が味わえる多彩な装飾を施した住宅部材や家具が、大量生産方式の進展により、手ごろな価格で入手できるようになったためである。とりわけ客間であるパーラーは、中流階層の経済的成功を象徴するように、暖炉、ピアノ、飾り棚、テーブル、ソファ、椅子、絵画などで飾られた。

アメリカの産業発展は製造業が主軸であった。南北戦争後、全国的な鉄道網が整備され、大量の移民が労働力にも消費者にもなって豊富な市場が形成された。自動車産業を例にあげると、フォード社は1913年、徹底した分業システムの導入により熟練工不要の大量生産システムを開発し、市場の過半を掌握する。しかし間もなくGM社の多彩な商品展開とモデルチェンジによる商品差別化戦略、広告宣伝戦略がフォード社を凌駕するにいたる。こういった、大量生産、商品差別化、広告宣伝、欲望の喚起、大量消費という消費社会の構図は、食品、衣料品、家電製品などにも普及する。

広告宣伝にあたって重要な役割を果たしたものが新聞雑誌であり、とりわけ雑誌は、19世紀末から20世紀初頭にかけて発行部数が急増している。前節で述べた『レディース・ホーム・ジャーナル』（創刊1883年、明治16）や『ハウス・アンド・ガーデン』（同1905年、明治38）、あるいは『ハウス・ビューティフル』（同1896年、明治29）などもこの時期に創刊された。カタログによる通信販売が普及しはじめたのもこの頃である。住まいに関しても、量産品のドア・窓・柱・手すりなどの部品や、家具・敷物などの内装品などに加えて、住宅そのものもカタログ販売された。住宅のカタログ販売は、大量生産された釘と、規格化された木材によって熟練を要せずに建てられる2"×4"（ツーバイフォー）工法の開発が可能にしたものである。先に述べた橋口が持ち帰った組み立て住宅とは、このことであった。商品の分割払い、ローンによる住宅購入もこの時期に広がった。

商品消費の普及は、商品購入の前には平等という民主主義の感覚を生み出す。中流階層の人々は、もはや上流階級の手の込んだ生活スタイルを模倣せずとも、近代的で合理的な家電製品などの生活財によって、自身の階層帰属性を顕示しうようになったのである。住宅についても、装飾過多なクイーン・アン様式ではなく、近代的な時代にふさわしい自分たちのスタイルを求めるようになった。これに答えたものが、シングルススタイル、プレーリースタイル、バンガロースタイルなどの近代デザインであり、これらを生み出した建築家たちであった。

3.3 アメリカの住宅とリビングルーム

近代的住宅デザインの端緒となったシングルススタイルは、建築家リチャードソンやマッキム・ミード・アンド・ホワイトを主な担い手として、1880年代に完成をみる。外壁をシングルで覆い水平線を強調したシンプルな外観、広々としたリビングホールを中央に置く開放的居室構成などが特徴であり、そこにはコロニアル様式での民主的で慎ましい生活が含意されていたという¹⁶⁾。

リビングホールを中央にとる空間構成手法は、イギリスの建築家リチャード・ノーマン・ショーによる1870年代の住宅が発端となり、1890年代以降、ヴォイジーさらにはベイリー・スコットに引き継がれていく。スコットは、リビングホールを「夕方家族が火の回りに集う場所」として、中流階層の小住宅に出現させた。アンウィンとパーカーも中流階層の小住宅について、大邸宅の縮小型とするのではなく、広々とした居間を中心にして居室を構成すべきであると考え、居間を中心とした平面を生み出した。儀礼的なパーラーを廃して日当たりの良いリビングルームを確保しようとの主張もおこなっている¹⁷⁾。英米の建築家達は、互いに影響を与え合いながら、新しい住宅を生み出していった。

米国において、シングルススタイルを出発点としながらも、独自のデザインを生み出した建築家がフランク・ロイド・ライトであった。ライトは1900年（明治33）からの10年間に、水平線を強調した外観で知られるプレーリースタイルを完成させている。平面は、中央の暖炉を核にして居室を十字形に配することが特徴で（2つないし3つのウィングの場合もある）、1階のパブリックゾーンは連続的開放的構成となっていた。パブリックゾーンには、「パーラー」でもなく、シングルススタイルの「ホール」でもない、「リビングルーム」と記された広々とした空間が出現している¹⁸⁾。ライトの作品は1901年（明治34）に『レディース・ホーム・ジャーナル』に掲載され人気を博し、広く知られるようになる。ライトによる連続的開放的空間構成は、アメリカの住宅デザインにおいて革命的出来事だった。

カリフォルニアで活躍したグリーン・アンド・グリーンは、温暖な気候に適合した開放的な空間構成や、アーツ・アンド・クラフツに基づくクラフトマンシップなどを特徴とするバンガローハウスを1903年頃から多数手がけている。バンガローハウスとは、インドのベンガル地方の住宅形式をルーツにしたもので、ベンガルがバンガローと訛ったものらしい¹⁹⁾。深い庇とベランダがついた自然環境と融合するような小住宅であり、素朴なつくりを特徴としていた。バンガローハウスは、アメリカの伝統的で素朴なコロニアルスタイルを想起させることもあって、1900年頃から大流行した。バンガローハウスには、格式ばっ

たパーラーよりも、家族が日常使う空間であるリビングルームがふさわしいといった考えが提案され浸透していった。リビングルームには暖炉を備え、本棚、椅子、ソファなどを置き、家族が集う部屋であるとともに、接客にも書斎にも使う部屋とされた。クラシカルな凝ったつくりの家具よりも、クラフトマンシップを生かした簡素な家具が置かれるようになり、家具も少ないほうが良いとされた。こういったバンガローハウスを多数紹介、簡素な手作り家具の良さを説いたのが、家具職人のグスタフ・スティックリーであり、スティックリーが編集した雑誌『クラフトマン』であった。

ところで、これらの近代的住宅デザインに共通する特徴として、水平線の強調、開放的居室構成、自然との一体感が挙げられるが、実はこれらのデザインには、日本建築の特質が大きく影響していた。欧米で生み出されたアール・ヌーボーをはじめとする近代デザイン自身が、日本の文物との出会いを発端とするジャポニズムの影響を深く受けていたことはよく知られている²⁰⁾。マッキム・ミード・アンド・ホワイต์やグリーン・アンド・グリーンなどのアメリカの建築家たちも日本文化や建築に関心を寄せていた。1876年（明治9）のフィラデルフィア百年際出品の日本住宅、1893年（明治26）のシカゴ博覧会に出品された、平等院を模した「鳳凰殿」、1894年（明治27）のミッド・ウィンター博覧会出品の日本建築などによって、アメリカの建築家達は実物の日本建築や日本庭園に接することとなり、柱と梁、障子、襖、鴨居、欄間、畳などによる自在な空間構成や、庭と建築との一体感などが大いに称賛され議論されたという。浮世絵収集などによって日本文化に関心を寄せていたライトも、シカゴ博の交通館の設計に携わっていたこともあって、鳳凰殿の建築現場に幾度も足を運び衝撃を受けたという。

日本において、日本住宅が批判的となり、壁とドアによる居室の独立化が目指されていた頃、欧米では、日本住宅の特質が称賛され、壁で仕切られた箱を脱し、連続的一体的な空間構成へとデザインの革新が進んでいたのであった。

4. 住宅改善思想と洋風居間の出現

4.1 生活改善同盟会の指針

話を日本にもどして、大正時代の住宅改善において、具体的な指針を提示したのは、文部省主導で結成された生活改善同盟会の住宅改善調査会であった。住宅調査会は大正9年（1920）に、住宅改善の大綱6か条を解説付きで、『建築雑誌』『住宅』『建築と社会』などの主要雑誌に発表した。その6か条とは、

1. 本邦将来の住宅は漸次椅子式に改むべし
2. 住宅の間取設備は在来の接客本位を家族本位に改むべし
3. 住宅の構造及び設備は虚飾を避け、衛生及び災害防止等の実用に重きをおくべし
4. 庭園は在来の鑑賞本位に偏せず保健防災等の実用に重きをおくべし
5. 家具は簡単堅牢を旨とし住宅の改善に準ずべし
6. 大都市にありては、地域の状況により、共同住宅及び田園都市の設備も奨励すべし

であった。明治の後半以降さまざまに論じられてきた住宅改善の思想が、具体的指針とし

て、ここに簡潔明瞭に「言語化」されたのである。

これらの主張のうち、1、2、3、5の項目が洋風居間の形成と関連があると考えられるので、以下で考察を加えてみたい。

まずは「接客本位から家族本位へ」についてである。この簡潔な一文の意味するところは概ね次の二点と思われる。在来の日本住宅では、

1. 座敷などの接客空間(家長の空間でもある)が住まいの主要な部分を占めており、家族の生活を圧迫しているのを、それを改め、居間や台所などの家族の生活空間を日当たりの良い場所に広く確保すべきこと。
2. 居室が連続しておりプライバシーが守れないので、個人の部屋を独立させるとともに個人が集う空間を確保すべきこと。

つまるところ、接客本位から家族本位への改善とは、封建遺風の身分的秩序に基づく座敷優先の間取りを廃して、個人尊重の民主主義的秩序に基づく間取りに改めることを意図したものであった。

接客本位から家族本位への改善を、前節で述べた同時代の英米の住宅革新と比べてみると、接客儀礼空間である「パーラー」を「座敷」に、「リビングルーム」を「居間」に置き換えればそのまま当てはまり、両者は酷似している。「虚飾を避け実用本位に」「家具は簡単堅牢に」も同様である。明治後半以降論じられてきた住宅改善が、大正9年(1920)になって言語化できたのは、同時期のイギリスやアメリカにおいて近代住宅思想が熟し、実際の住宅として空間化されていたからにはほかならない。

ところで、「接客本位から家族本位へ」が根拠としている在来住宅の接客本位性に関して、大岡敏昭氏による「接客本位論の誤謬」という興味深い研究が平成11年(1999)に発表されている²¹⁾。当時の地方都市の中流住宅を収集分析してみると、当時の住まいが必ずしも接客空間を南面に優先確保していたわけではなく、接客空間が家族空間を圧迫していたともいえず、座敷も簡素なつくりであったというのである。先に述べた英米の近代住宅との類似性、明治以降の国策としての西洋化なども考えあわせると、住宅改善の指針は、在来住宅の詳細な実態把握の上に立った指針というよりも、建築家や生活改良家が、先進的とみなした英米の近代住宅デザインをわが国に取り入れることを主眼とした指針だったと考えられる。当時の建築家や生活改良家にとっては、実態はさておき、在来住宅は接客空間優先であり、接客部分に無用な装飾を施していると、やや勇み足に規定されねばならなかったのであろう。

次に「椅子式化」の項目であるが、その意図するところをまとめると、わが国生活上の大問題である和洋の二重生活を早急に解決せねばならないが、畳およびユカ式の生活は非能率不衛生であるなど欠点が多いのに対して、イス式は、欧米諸国をはじめ世界共通の方式であり長所が多いので、ユカ式を廃してイス式にする方向で解決すべきであるとまとめられる。この項目は、第一回の会合において多数の賛成を得て決定されたという。さらに大正10年には、「住宅の間取り及び設備の改善」の細目が発表されている。細目では居間、食事室、客間などの共用室をまずイス式にすべきことを説き、イス式化にともなう種々の

懸念に対しても、イス式化してもさほど広い面積を要しないことや、住宅を改良すればわずかな暖房で部屋全体が温まるから寒くはないなどとして、イス式化を推奨している。

ところで住まいの「西洋化」という視点からこれら項目を考察すると、「椅子式化」の項目は、他の3項目と性質が異なっていることがわかる。「接客本位から家族本位へ」「虚飾を避け実用本位に」「家具は簡単堅牢に」の項目については、近代化にあたって英米デザインを手本にしている点においては、近代化でもあり西洋化でもあるわけだが、「椅子式化」の項目のみは、明らかに「西洋化」に重点がある。なぜなら、①欧米諸国では近代以前から椅子式生活をしていたわけだから、近代化＝椅子式化ではないし、②畳とユカ式が、椅子式に対して本来的に不合理であるとも言いきれず、③二重生活の解消にはイス式化以外の方法もありうるからである。「椅子式化」の項目が大纲の第一条に置かれ、いささか強引に推奨されている点からは、欧米に遅れて近代化を目指すわが国の近代化が、欧米諸国の模倣＝西洋化と不可分であった事情が読み取れてくる。

欧米諸国の側からいえば、日本住宅の、水平垂直線による簡潔なデザイン、開放的空間構成、自然との融合などの諸要素は近代デザインに採り入れはしたが、畳自体は、モジュールのヒントにしたものの採り入れておらず、ユカ式もしかりである。イス式かユカ式かという起居の様式が、近代化問題以前の、生活慣習にかかわる根源的要素であるからにはほかならない。だからこそ、欧米を範として住宅近代化を進めるには、畳そしてユカ式をこそイス式に改めねばならなかったのである。

「家族本位へ」「まずは共用室から椅子式に」、この二つの指針が、日本の住まいに洋風居間を出現させることとなる。

4.2 洋風居間の出現

洋風居間を有する住宅は、大正11年(1921)に東京上野公園で開かれた東京府主催の平和記念東京博覧会に登場することとなる。

建築学会では当時、欧米での視察にもとづき、二重生活を改め住宅改良をすすめるにはモデルとなる住宅の展示が是非必要だと考えていた。そこで東京府主催の大規模な展覧会を好機と考え、住宅展示を申し入れたのである。出展作品の募集に際しては、建坪20坪程度、坪単価200円以下のほか、プランニングに関するいくつかの条件が提示されており、その一つが、「居間、台所、食事室は椅子式に」であった。こうして14棟の戸建て住宅が建設され「文化村」と命名された。平和記念博は娯楽色豊かに企画され、1100万人の入場者を集めたというが、文化村も、14棟のモデルハウスを見学できるとあって大人気だったという。

展示された住宅の間取りをみると、居間兼食堂が広くとられ、壁とドアによって間仕切られ、イス・ソファ・ベッドなどの家具が置かれるなど、住宅改善の指針がまさに「空間化」されている。しかし奇妙なことに、洋風居間を備えたこれらの近代的モデル住宅の半数以上に、小さいながらも「応接間兼書斎」が確保されているのである²²⁾。明治末に北田によって提案されて以来、中流住宅のシンボルとして普及してきた洋風応接間が、中流住宅にとっていかに不可欠の存在であったかを物語っているようだ。ただし、バンガロー住

宅を範としているあめりか屋の出展住宅には応接間はない。

大正11年の9月には、大阪の箕面有馬電鉄桜が丘において、日本建築協会主催の住宅改造博覧会が開かれ、ここでも35坪程度の戸建て住宅が25戸展示された。この博覧会でも、「居間等はイス式にすべき」との考えが前提とされており、展示住宅の間取りには洋風居間がとられていた。もちろん応接間兼書斎も確保されている。洋風居間を持つ洋風住宅の住宅地は、これ以降も、東京や関西でいくつか生み出されているが、少数例にとどまった。インターナショナル・スタイルの影響を受けた建築家達による住宅作品にも洋風居間が設けられたが、これも少数例であった。第二次大戦前までの中流階層の住宅では、依然として、和風の居住部分に洋風応接間を付加した間取りが主流だったのである。

洋風居間を有するような洋風住宅は、なぜ少数にとどまったのであろうか。和服にちゃぶ台、ふとん、火鉢にこたつといった当時の生活とかけ離れていたからでもあるだろうが、なんといっても、洋風住宅が大変高価で手が届かなかったことに主因がありそうだ。第二次大戦前には都市居住者のほとんどが借家住まいであったから、土地付き戸建て住宅というだけで高嶺の花だった。森本厚吉が大正11年に行った中流階層388人の調査でも、全員が借家住まいで年間の生活費が2000円、家賃はその17%だったという²³⁾。洋風住宅の価格はというと、桜ヶ丘住宅改造博覧会の住宅は大半が15000円から19000円、中流階層の年間生活費の7倍以上になる。展示住宅は博覧会終了後そのまま売りにだされたが、5戸しか売れなかったというのも納得できる²⁴⁾。当時の大壁式洋風住宅は、建築費をはじめ、設備費、家具装備費など全般に費用がかさんだのである。実際に生活するにつけても、洋風住宅にふさわしい洋服その他の生活用品をそろえねばならず、洋風生活の諸費用は相当なものになったであろう。イス式の生活はユカ式に比べて多くの生活財(モノ)を必要とするのである。

一方和風住宅をみると、大正5年(1915)頃の箕面有馬電鉄池田豊中では、30坪程度で3500円から5000円であったし、昭和13年(1938)の箕面有馬電鉄武庫之荘でも、26坪で7500円程度であり、洋風住宅よりはずっと安く入手できた²⁴⁾。家具購入の必要もなく、従来どおりの生活が営めるため経済的であった。

ところで、桜ヶ丘住宅改造博覧会展示住宅の15000円から19000円という価格が、当時どれほど高級であったかは、大正11年(1922)より分譲が開始された東京目白の文化村の資料が教えてくれる²⁵⁾。目白文化村の住宅は、外観は洋風が多かったが、間取りは、和洋折衷タイプが主であり、完全洋風タイプと、応接間のみ洋室タイプの間とといったところであり、分譲価格はおおむね10000円から15000円であった。大正14年(1925)当時の土地購入者の職業をみると、大会社の役員を含む実業家、高級官僚、上級軍人、政治家などの、中流というよりも上流階級に属する人々が半数を占めている。残りの半数弱は、学者、会社員(大会社を含む)・公務員、医師、芸術家などの新興中流階層であった。目白文化村の昭和15年(1940)の居住者名簿では、半数が会社役員と学者・教員であり、世帯主の学歴は東京帝国大学卒など高学歴者が多く、学問や仕事による洋行経験者も多い。洋風住宅と、上層中流階層とりわけ西洋の学問知識に通じた知識階層との結びつきが強かったことが読み

取れる。

洋室が実際どのようにしつらえられたかをみると、応接間には、ソファ・イス4脚・テーブルによる6点セットが一般的であったが、居間・食堂では、食卓と椅子は備えるが、ちゃぶ台かこたつしかない家もあるなど、和洋折衷のしつらいだったという。実際の住まい方はともあれ、洋風住宅は橋口信助が当時指摘したように、上層知識階層のステータスシンボルであったといえる。

こういったなか、あめりか屋の山本拙郎技師は、在来の真壁式工法のままで、中流階層の人々にも手ごろに入手できる洋風住宅を発案し、「あめりか屋式住宅」として大正11年に宣伝を試みるが、反応は芳しくなかったという。在来和風の真壁式にイス式洋風の取り合わせは、当時の人々にミスマッチと映ったのであろうか。山本拙郎が住宅価格の低廉化に苦心したのは、アメリカの規格化された低価格住宅が念頭にあったからである。当時流行していたバンガロー住宅は3000ドル程度、中流階層の平均年収が約1500ドルだったというから、格段に安い。ローンも普及していた。当時すでにアメリカでは、中流階層の大衆的住宅市場が確立しつつあり、バンガロー住宅は、消費民主主義を象徴する存在だったのである。

もちろん、アメリカのバンガローハウスも、奥出直人氏がいうように、「生活の改善運動とも、装飾を廃する美学的モダニズムとも無縁なはずの商業的目論見が、効率と合理性を特徴とするバンガロー様式の住まいのデザインに紛れ込み……1890年代から始まった改革運動も、それを支えた家政学も、モダニズムの住宅デザインも、1920年代には全て、消費社会を正当化するイデオロギーに組み込まれていった。ユルゲン・ハーバマス流に言うならば、自由、平等、豊かさを目指した近代のプロジェクトであるバンガローハウスはその志半ばで、未完となった」のである¹⁴⁾。

日本の洋風住宅も、洋風への特異な価値付けをともないながら、やがて第二次大戦後の高度成長のもとで、類似の展開をとげることとなる。

5. 日本における住宅近代化の逆説

明治後期から第二次大戦前までの住宅改良や住宅改善思想を振り返り、洋風居間の形成過程を、中流階層の出現や消費社会の進展などに着目しながら考察してきた。

明治後期から大正期は、在来の和風住宅批判と住宅改良および住宅改善が盛んに論じられた時期であった。欧米諸国においても、客間であるパーラーを廃しリビングルームを設け、無用の装飾を避け、家具も少なく簡素になど、住まいと生活の簡素化合理化民主化が唱えられていた。こういった欧米の近代住宅思想は、日本にも大きな影響を与えた。生活改善同盟会は、6項目の住宅改善指針を提示したが、これらのうち「接客本位から家族本位へ」「家具は簡単堅牢」「構造設備は虚飾を避け」などは、欧米の近代住宅思想を引き写したものである。しかしながら、最重要項目であった「椅子式化」のみは、わが国独自のものであり、強引ともいえるイス式化の推奨には、西洋模倣と不可分に進行した日本の住宅近代化の特質が端的に顕れている。

こういった住宅改善思想によって生み出された空間が、洋風居間であり洋風住宅であった。洋風居間と洋風住宅は、生活改良家や建築家の熱き理想の産物であったが、当時の建設事情等から、現実には、一部の上層中流階層にしか手の届かない高級住宅とならざるをえず、洋風住宅＝高い建築費＝豊富な家具や設備＝高級というイメージが生み出される結果となった。欧米の近代住宅デザインのねらいは、上流階級のシンボルである装飾過多な様式を真似ることをやめ、新興の中流階層にふさわしい簡素で合理的な革新的デザインの創出にあったが、それらを手本とした日本の洋風住宅は、当初の意図に反した展開をしたのである。簡素で合理的なはずの洋風住宅とそこでの暮らしは、もともと簡素な日本の住まいと暮らしに比べると、ずっと豊饒な存在であった。そして、階級的シンボルを廃したはずの洋風住宅は、先進的で豊かで日本より上位にある西洋を想起させ、上層中流階層とりわけ知識階層のステータスシンボルとなったのである。

後発の近代国家である日本の、近代住宅デザインに内包される逆説の出現であった。

この論理は、第二次大戦後の高度成長のなか、消費社会の渦に巻き込まれ形を変えながらも引き継がれていくことになる。

注

- 1) 住宅近代化の流れ全般に関しては、次の文献を参考とした。

太田博太郎編『住宅近代史』雄山閣、1969年、木村徳国論文

西山卯三『日本のすまいⅡ』劉草書房、1976年、1～5章

内田青蔵『日本の近代住宅』鹿島出版会、1992年

- 2) 河東義之「ステータスシンボルとしての洋館」『月間文化財』、1987年12月

- 3) 岡本肇太郎「和洋折衷住家の地絵図について」『建築雑誌』、1898年10月

- 4) 北田九一「和洋折衷住家」『建築雑誌』、1898年12月

- 5) 洪沢敬三編『明治文化史 12生活』原書房、1979年、p.299参照。

- 6) 木村徳国「明治時代の都市住宅」前掲『住宅近代史』雄山閣、1969年、p.84参照。

- 7) 学歴やサラリーマン層に関しては次の文献を参考とした。

竹内 洋『立身出世と日本人』NHK人間大学テキスト、1996年

- 8) 土屋元作『家屋改良談』時事新報社、1899年

発表の翌年には単行本として出版された。

- 9) 滋賀重列「住家(改良の方針について)」『建築雑誌』、1902年2月、11月

- 10) 塚本 靖「住家の話」『建築雑誌』、1903年4月

- 11) 矢橋賢吉「本邦における家屋改良談」『建築雑誌』、1903年12月

- 12) あめりか屋に関しては次の文献を参考とした。

内田青蔵『あめりか屋商品住宅』住まいの図書館出版局、1987年

- 13) 吉見俊哉『博覧会の政治学』中公新書、1992年、第4章参照。

- 14) アメリカンホームについては次の文献を参考とした。

奥出直人『アメリカンホームの文化史』住まいの図書館出版局、1988年

- 15) アメリカの消費社会や中間層に関しては次の文献を参考とした。
常松 洋『大衆消費社会の登場』山川出版社、1997年
- 16) Vincent Scully, *The Shingle Style Today*, 1974, 長尾重武訳『アメリカ住宅論』鹿島出版会、1978年
- 17) 片木 篤『イギリスの郊外住宅』住まいの図書館出版局、1987年
- 18) 二川幸夫編『フランク・ロイド・ライト全集 第9巻』A.D.A.EDITA Tokyo、1978年
- 19) 八木幸二『アメリカの住宅建築Ⅲ』講談社、1994年
- 20) 由水常雄『ジャポニズムからアールヌーボーへ』中央公論社、1993年
- 21) 大岡敏昭「接客本位論の誤謬」『日本建築学会計画系論文集』524号、1999年
- 22) 前掲注1 文献の掲載図面を参考とした。
- 23) 野田正穂、中島明子編『目白文化村』日本経済評論社、1991年、p.89参照。
- 24) 和洋の住宅価格に関しては次の文献を参考とした。
安田 孝『郊外住宅の形成』INAX、1992年
- 25) 目白文化村に関しては注23の文献を参考とした。